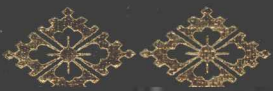


379872



日本
国語
大辞典

あ—いくん



日本國語大辭典

第一卷

編集 日本大辭典刊行会
発行 小学館

日本国語大辞典 第一卷

昭和四十七年十二月一日 第一版第一刷発行 ©
昭和五十五年七月一日 第二版第六刷発行

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相賀徹夫

印刷者 小林清

発行所 株式会社 小学館

東京都千代田区一ツ橋二-3-1
〔郵便番号〕100-1〔振替〕東京8-1200

* 造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

編集方針

- 一 この辞典は、日本語の意味用法などを、文献に徴して、歴史的に記述しようとするものである。
- 二 収録する語は、歴史的な文献に見られるものはもちろん、現代語にも及ぶ。また、地名・人名など固有名詞、専門用語をも含む。
- 三 語義説明は、ほぼ時代を追って記述し、その実際の使用例を、書名とともに示す。
- 四 用例文は、文学作品やいわゆる国語資料のみに限らず、広く歴史・宗教その他諸学の歴史的な文献からも採録する。
- 五 文献は、上代から明治・大正・昭和に及ぶ。また、漢語については、中国の文献をも用いる。
- 六 文献は、それぞれ信頼すべき一本を選び、異本から採録する場合は、その旨を表示する。
- 七 用例文の出所は、できるだけ詳細にする。また、一見してその分野や時代がわかるように、分野名や作者名を付記するものもある。
- 八 方言・語源説・発音・古辞書の欄を設けて、それぞれの分野の解説を収める。
- 九 見出しのかたち、および解説文は、現代の視点に立って引きやすく読みやすいように配慮する。

記述の要素

この辞典の記述は、次の要素から成り立っている。

見出し 歴史的かなづかい 漢字 品詞 語釈 出典・例文
 補助注記 方言 語源説 発音 古辞書

そして、各項目ごとに、必要とする要素を右の順に記述する。

各要素の説明

見出しについて

一 見出しの種類

- 1 かたちの上で、親見出しと子見出しの二段階があつて、およそ次のように区別する。

親見出し……自立語・付属語・接辞などの、いわゆる単語の類

子見出し……慣用句・ことわざなどの類

- 親見出しは、やや大きめのゴシック体で示し、子見出しはその該当する親見出しの項につづけて、一字下げたやや小さめのゴシック体で示す。

- 2 記述の内容から、本見出しとから、見出しがあつて、およそ次のように区別する。

本見出し……解説・用例など、すべてを記述する項目

から見出し……別に本見出しがあつて、それを母をもって指示する項目

二 見出しの文字

- 1 和語・漢語はひらがなで示し、外来語はかたかなで示す。

- 2 和語・漢語については、古語・現代語の別なく、現代かなづかいに準ずる。ただし、現代かなづかいで表記しえないものは歴史的かなづかいにより、また、まぎらわしいものは歴史的かなづかいの見出しをも立てて、本来の見出しを参照させる。方言は、必ずしも現代かなづかいには準じない。

- 3 外来語については、現代かなづかいにこだわることなく、長音は「ー」をもって表わすなど、現在もつとも一般的と思われる表記による。ただし、「ヴァイヴヴェヴォ」は「バビブベボ」、「キエヲ」は「イエオ」、「ヂヅ」は「ジズ」とする。本見出しに統合した見出しと異なる形は見出しの下の《 》内に示す。また、必要に応じて別に見出しを立てて参照させる。

三 見出しの中に示すかな以外の記号

- 1 見出しの語の構成を考へて、最後の結合点がはっきりするものには、結合箇所にはハイフンを入れた。ただし、固有名詞・方言などは入れない場合が多い。

- 2 活用することばには、活用語尾の上に・を入れる。シク活用形容詞は、語

幹がそのまま終止形であるが、語尾の「し」の上に特に。を入れる。

四 活用語の見出し

1 動詞

(イ) 文語形と口語形とが存在するものは、口語形を本見出しとし、文語形を【…】の形で示し、統合する。その場合、文語形については必要に応じてから見出しを立てる。

(ロ) 原則として、終止形を見出しとする。

(ハ) 名詞から派生したサ変動詞は、原則としてその名詞の項目に統合する。

2 形容詞

(イ) 文語形と口語形とが存在するものは、口語形を本見出しとする。

(ロ) 原則として、終止形を見出しとするが、語幹を別項に立てるものもある。

3 形容動詞

(イ) 文語・口語ともに語幹を見出しとする。

(ロ) 形容動詞の語幹と名詞とが同じ形で存在する語については、原則として、その名詞の項目に統合する。

4 助動詞

文語・口語ともに、原則として終止形を見出しとするが、他の活用形で語頭から終止形と一致しないものなどは、必要に応じてその活用形も別に見出しに立てる。

歴史的かなづかいについて

1 歴史的かなづかいが、見出しのかなづかいと異なるものについては、見出しのすぐ下に、小さいの字で、その歴史的かなづかいを示す。

2 見出しの「および・は、歴史的かなづかいの中では省略する。

3 見出しに「ー」のはいるものは、その前後を分けて考え、見出しと歴史的かなづかいが一致する部分は、：によって省略して示す。

4 和語はひらがな、漢語(字音語)はかたかなで示す。ただし、その区別の決めにくい語のうち、漢字の慣用的表記のあるものは、その漢字の歴史的かなづかいに従う場合もある。

5 字音語のうち、音変化をきたして今日の形になっている語、「観音(クワンオン↓クワンノン↓カンノン)」の類、「天皇(テンワウ↓テンノウ)」の類、「および」、「学校(ガクカウ↓ガッコウ)」の類は、便宜上それぞれもとのかたち

の「クワンオン・テンワウ・ガクカウ」を、歴史的かなづかいとして示す。

6 方言・固有名詞などでは歴史的かなづかいの注記を省略するものもある。

漢字欄について

1 見出しの語に当てられる慣用的な漢字表記のうち主なものを【】の中に示す。

2 慣用的な漢字表記が二つ以上考えられる場合、それらを併記するが、その配列は、主として現代の慣用を優先する。その判断を下しがたいものは画数順に従う。

3 見出しの語の構成上、漢字を当てる慣用のない部分を含むものについては、原則としてその見出しについて漢字欄を省略する。ただし、その要素が外来語である場合は、外来語の部分に「ー」を当てて示す。

4 いわゆる当て字の類もできるだけ示し、植物などで漢名を当てる慣用のあるものについては、その漢字をも示す。ただし、万葉集等での万葉がな書きは示さない。

5 字体は当用漢字に従い、構成のいちじるしく異なるものなどについては必要に応じて、いわゆる旧字体をも示す。かたかな・ひらがな、またはローマ字で書く慣用が固定していて、漢字と熟合するものについては、それらをも含めて示す。

6 送りがなは一切省略する。

7 固有名詞の項目では、書名等の原題を漢字欄に示すこともある。

品詞欄について

1 見出し語について、次の品詞表示を設ける。

名詞 【名】

代名詞 【代名】

動詞 【自カ四】…自動詞カ行四段活用

自動詞・他動詞の区別を、自・他で示し、活用する行とともに活用の種類を次の略号で示す。

四段活用 四 (現代語は便宜上五と示す)

上一段活用 上一

上二段活用 上二

下一段活用 下一

下二段活用 下二
カ行変格活用 カ変
サ行変格活用 サ変
ナ行変格活用 ナ変
ラ行変格活用 ラ変

形容詞

〔形ク〕……形容詞ク活用
〔形シク〕……形容詞シク活用

形容動詞

〔形口〕……形容詞口語形活用
〔形動〕……形容動詞ナリ活用
〔形動タリ〕……形容動詞タリ活用
〔形動ナリ・タリ〕……ナリ活用・タリ活用両様あるもの

副詞

〔副〕
〔連体〕
〔接続〕
〔感動〕

助詞

〔格助〕……格助詞
〔副助〕……副助詞
〔係助〕……係助詞
〔接助〕……接続助詞
〔終助〕……終助詞
〔間投助〕……間投助詞

助動詞

〔助動〕
〔接頭〕
〔接尾〕……助数詞を含む。

接頭語

〔語素〕……造語要素としての
〔字音語素〕……右に準ずる漢字音の要素

接尾語

〔連語〕……親見出しに立てられても単語とみなされないもの
〔枕詞〕……品詞に準じて示す。

枕詞

〔枕詞〕……品詞に準じて示す。

以上のほか、方言の動詞・形容詞・形容動詞・助詞については、それぞれ細かい分類注記を省略して、『動』『形』『形動』『助』と示す。
2 品詞欄に準ずるものとして、次の注記を、語積の冒頭に加える。
(一する)……それに続く語積に関して、サ変としての用法も存在すること
を示す。ただし、その見出しの語の語積すべてについてサ変の用法が認められるものについては、いちいち注記しない。
(形動 形動タリ)……その語、ないし、それに続く語積に関して、形容動

詞としての用法も存在することを示す。
3 方言についての品詞表示は、「方言欄」について一・四・(ハ)を参照。
4 固有名詞は、特に品詞名を示さないで、普通名詞と区別する。

見出しの配列について

一 親見出しの配列

親見出しは、1 かな表記、2 品詞別、3 和語漢語の別、4 漢字表記、の順にそれぞれ一定の配列法に照らして配列する。

1 かな表記による順

(イ) 五十音順

一字目が同じかなのものは二字めのかなの五十音順。二字めのかなも同じものは三字めのかなの五十音順。以下これに従う。この場合、長音符号「ー」は、直前のかなの母音と同じとして考える。

(ロ) 清音↓濁音↓半濁音の順

(ハ) 小文字が先、大文字が後。すなわち、拗音↓直音の順、または促音↓直音の順

(ニ) ひらがなが先、かたかなが後。すなわち、和語・漢語↓外来語の順

2 品詞による順

(イ) 名詞↓代名詞↓動詞↓形容詞↓形容動詞↓副詞↓連体詞↓接続詞↓感動詞↓助詞↓助動詞↓接頭語↓接尾語↓造語要素↓連語↓枕詞の順

(ロ) 名詞の中では、普通名詞↓固有名詞の順

(ハ) 字音語素は、漢語の先に置く。

3 和語・漢語の別による順

(イ) 和語↓漢語の順

(ロ) 和語・漢語の複合しているものは、語頭部分の和語・漢語によって考える。

4 漢字表記による順

(イ) 漢字欄に、漢字が当てられるものが先、漢字が当てられないものが後。
(ロ) 漢字が当てられる場合、その漢字が一字のものが先、二字のものが後。以下これに従う。

(ハ) 同数の漢字が当てられる場合、第一字めの漢字の画数が少ないものが先、その画数が多いものが後。第一字めの画数が同じなら二字めの画数が少ないものが先、画数が多いものが後。以下これに従う。

- (二) 画数の同じものについては康熙字典(こうきじてん)の順序による。
- 5 外来語で、同じかなの見出しは、その語のものとローマ字つづりのアルファベット順による。

二 子見出しの配列

子見出しが二つ以上ある場合は、その五十音順による。その場合、漢字は、それをかなに置きかえてみたときの五十音順による。

語釈について

一 語釈の記述

- 1 一般的な国語項目については、原則として、用例の示すところに従って時代を追って記述する。
- 2 基本的な用言などは、なるべく根本的な語義を概括してから、細分化して記述する。
- 3 専門用語・事物名などは、語義の解説を主とするが、必要に応じて事柄の説明にも及ぶ。

二 語釈に用いる分類記号

語義・用法を分ける場合、必要に応じて次の分類記号を用いる。

■ ……品詞または動詞の自・他の別、活用の種類の別などによって分けるとき

①② ……根本的な語義が大きく展開するとき、漢字の慣用がいちじろしく異なるとき、または、一項にまとめた固有名詞を区別するとき

①② ……一般的に語釈を分けるとき

①② ……同一語釈の中で、特に位相・用法の違いなどによってさらに分けるとき

三 語釈冒頭の注記

語釈の冒頭に、必要に応じて次のような注記を()内に示す。

1 和語・漢語について

- (イ) 語の成り立ちの説明および故事・ことわざの由来など
- (ロ) かなづかい・清濁・活用などの問題点
- (ハ) 用法の説明、または品詞に準ずる注記

2 外来語について

- (イ) その原言語名と、ローマ字での原つづり、または原つづりのローマ字化つづり、および必要に応じてその原義をも示す。
- (ロ) 原言語名は、次のような略号を用いる。

英：英語 英；ドイツ語 独；フランス語など

ただし、英語のうち米国語を区別する必要があるときは英と示す。

- (ハ) 外国語に擬して日本でつくられた語には洋語と示し、さらにその語の成り立ちが推測できるものについては、その該当する原言語名・原つづりをも注記する。

3 固有名詞について

- (イ) 書名・地名などの原表記。外国の書名はその原つづりをローマ字化したつづり
- (ロ) 外国人名の原つづりをローマ字化したつづり

四 語釈の末尾に示すもの

- 語釈の末尾に、必要に応じて次のようなものを示す。
- 1 同義語は、語釈のあとにつづけて示す。
- 2 反対語・対語などは、同義語の後に↓を付して注記する。
- 3 参照項目は、右につづいて↓を付して注記する。
- 4 季題として用いられるものは、すべての語釈が終わったあとに《》でくくって、新年・春・夏・秋・冬の別を示す。

五 語釈の文章および用字

当用漢字、現代かなづかい等にとり、できるだけ現代通用の文章で記述する。

出典・用例について

一 採用する出典・用例

- 1 用例を採用する文献は、上代から現代まで各時代にわたるが、選択の基準は、概略次の通り。
- (イ) その語、または語釈を分けた場合は、その意味について、もっとも古いと思われるもの
- (ロ) 語釈のたすけとなるわかりやすいもの

- (ハ) 和文・漢文、あるいは、散文・韻文など使われる分野の異なるもの
 (ニ) 用法の違うもの、文字づかいの違うもの
 なお、文献に用例が求めがたい場合、用法を明らかにするために、新たに作った用例を補うこともある。
- 2 用例の並べ方は、概略次の通りとする。
 (イ) 時代の古いものから新しいものへと順次並べる。
 (ロ) 中国の漢詩文は、末尾へ入れる。

二 典拠の示し方

- 1 各出典についておのおの一本を決め、それ以外から採る必要のあるときは、異本の名を冠して示す。ただし、狂言など、すべてについて伝本の名を表示するものもある。
- 2 底本は、できるだけ信頼できるものを選ぶように心がけるが、検索の便などを考え、流布している活字本から採用するものもある。
- 3 いくつかの名称をもつ出典名は一つに統一して示す。ただし、「物語」「日記」「和歌集」等を省略するものもある。
- 4 巻数・部立・章題・説話番号・歌番号など、必要に応じてできるだけ詳しく示す。
- 5 作者名を、それぞれへの中へ付記するものもある。
 (イ) 和歌・連歌・俳諧のうち類纂形態のものについては、用例文の末尾に作者の姓名を付記する。
 (ロ) 近代の作品には、その作者の姓名を付記する。
- 6 作品のジャンルを示すものもある。
 (イ) 幸若・謡曲・狂言・御伽草子などの類。
 (ロ) 近世の作品には、なるべくジャンルを冠する。

用例文について

用例文は、語釈のあとに*印をつけて示す。
 用例文は「」でくくり、適宜句読点を加えるなど、できるだけ読みやすくする。ただし、見出しに当たる部分は、なるべく原本の形に従う。

- 1 見出しに当たる部分の扱い
 (イ) 原則として原本のかたちを尊重するが、漢字の字体については次項 3 による。

- (ロ) 万葉がな・ローマ字等はそのまま表記し、適宜()内に読みをカタカナで付記する。
 (ハ) 見出し部分の漢字について、その読みが原本にあるものには()内にかたかなで示す。原本の読みが不確実な場合は、その部分をひらがなで補う場合もある。訓点資料なども、この原則に従う。
 (ニ) 原本の行の左右に付された訓注的なものを(注)の形で示す場合もある。
 (ホ) 拗音・促音・撥音は、確実なものに限って小字とする。
- 2 見出しに当たる部分以外の扱い
 (表記)

- (イ) 和文は、原則として漢字ひらがな混り文とする。ただし、ローマ字資料や古辞書については、かたかなを使う場合がある。
 (ロ) 万葉集・古事記・日本書紀・風土記・古語拾遺・日本霊異記・祝詞・宣命、および訓点資料は、原則として読み下し文で示す。
 (ハ) 漢詩文、およびそれに準ずるものは、できるだけ返り点を付ける。
 (ニ) 原本がかな書きでも、読みやすくするために、原文をそこなわない範囲で漢字を当てる。

〈かなづかい〉

- (イ) 上代から中世に至る、書写されて受け継がれた作品群は、歴史的かなづかいで統一する。ただし、中世の和文の記録(「御湯殿上日記」など)や狂言・幸若・御伽草子の類は拠ったテキストのかなづかいに従う。
 (ロ) 近世から現代に至る、主として印刷されて受け継がれた作品群は、テキストのかなづかいに従う。
 (ハ) 漢字の読みを助けるふりがなも右の原則に従う。
 (ニ) 拗音・促音・撥音は、確実なものに限って小字とする。
- 3 漢字の字体について
 (イ) 原則として当用漢字字体表の字体に従う。ただし、二つ以上の字体があつて整理されたものや、芸・藝・欠・欠・缺など別字と混乱するおそれのあるものについては、必要に応じて旧字体を残す部分もある。
 (ロ) 当用漢字表外の漢字については、原則として拠ったテキストの字体を尊重するが、極端な異体字や、成り立ちが同じで、かたちの類似しているものについては、なるべく普通のかたちを採用する。

4 その他

- 原本ないしテキストにおける、文字の大小の使い分け、割注の形などは、一行書きとする。この場合、ハ V () 「」などを適宜用いて、もとの形に準じて区別する場合もある。

補助注記について

語釈およびそれに伴う解説では十分に述べられない記述や、諸説のある問題点など、補助的注記を補注として示す。

方言欄について

一 収録する方言とその収め方など

- 1 近代の方言集・地誌の類、千余点から、約四万の方言を収録する。ただし、近世の方言集をも合わせ記載する場合もある。
- 2 一般語で扱う見出しと語の成り立ちが同じものは、その見出しにまとめ、末尾に〔方言〕と示して解説する。
- 3 一般語に該当する見出しがないものは、単独の見出しを立てて、語釈の冒頭に〔方言〕と示して方言独自の解説をする。
- 4 方言として独立する見出しは、方言の特殊性から次の扱いをするが、それ以外は一般語の扱い方に準ずる。

- (イ) 発音に近いかたちを見出しとする。
- (ロ) 用言については、終止形にこだわらないで、慣用の多いかたちを見出しとする場合もあり、活用語尾を示す・は省略する。
- (ハ) かたちの類似する同語源の方言のうち、一項にまとめたほうが理解しやすいものは、主たるかたちを決めて見出しとし、それ以外を（ ）で付記する。
- (ニ) 歴史的かなづかいの欄は設けない。
- (ホ) 漢字欄には、意味の上から当てたものもある。
- (ヘ) 品詞欄のうち、動詞・形容詞・形容動詞・助詞は、それぞれ『動』『形』『形動』『助』とし、その活用の種類や分類は示さない。

二 解説

方言欄の解説は、語釈、例文、地域名、出典番号 から成り、その順に記述する。

1 語 釈

- (イ) 一般語でいいかえられるものは、それを置きかえるなど、簡単にすることにとめるが、方言集などの記述をそのまま残すものもある。
- (ロ) 一般語と意味が重なる場合は、一般語の解説にゆだねる。一般語の意味が多岐にわたる場合は、重複して記述する。

- (ハ) 動植物については、一般的な名称をあげるにとどめる。まぎらわしいものについては、適宜、動物・鳥・魚・貝・あるいは植物などと注記する。

2 用 例

語釈をたすける意味で適宜用例を補うこともある。

3 地域名

- (イ) 各方言集などに示される地域名をそのまま掲げる。従って、その地域名は現在の行政区画とは必ずしも一致しない。
- (ロ) それぞれの語釈の中で、複数の地域名を示す場合、その順は、だいたい北から南へ並べる。

4 出典番号

- (イ) 典拠とした千余点の方言集その他の資料を番号化して、地域名の下に示す。
- (ロ) 出典番号は、三桁の数字ないし記号で示す。
 - 近世の資料には + を付し、101~199 の番号で示す。
 - 全国的な規模で収集されている資料は、001~099 の番号で示す。
 - その他の出典番号は100番台の数字で、地域を大別できるようにする。
 以上の出典番号と資料名については、別冊中に掲げる『方言資料および方言出典番号一覧』を参照されたい。

語源説欄について

- 1 文献に記載された語源的説明を集め、語源説欄に、その趣旨を要約して、出典名を〔 〕内に付して示す。
- 2 一つの見出しについて二つ以上語源説の存在するものは、(1)(2)と分けて示す。その順は必ずしも時代順や、その評価によらず、要旨の関連性によって整理する場合が多い。
- 3 およその趣旨を同じくするものは、共通の要旨でまとめて、〔 〕内にその出典名を、ほぼ時代順に併記する。
- 4 要約は極力原文の趣旨をそこなわないようにつとめるが、次のような処理をする。
 - (イ) もとになる語を示す場合や、音変化を示す記述では、その語はかたかなで示し、当てられる漢字を（ ）内に付記する。ただし、かなづかいは原典を尊重する。
 - (ロ) 言い伝えや、推測によるものは「…という」とか「…か」という表現で

- 示す。
- 5 出典名は、なるべく略称を用いないこととし、近代のものには作者名を書名の下に「」を付して注記する。

発音欄について

発音に関する注記を、**発音**の欄に次のような順序で示す。

語音について

一 標準語音

ここに注記する語は、現代語を中心として、その標準語音が見出しと異なるものである。ただし、現代語でなくても、現代語として発音できるものについては、必要に応じて加える。

- 1 ーは引く音を表わす。

こりり【行李】 **発音**こーりり
こおり【氷】 **発音**こーりり

- 2 イ・ウのようなものは、それぞれ「イ」「ウ」のようにも、前の拍の母音をひいて、引く音「ー」のようにも、発音されることを表わす。

ていねい【丁寧】 **発音**テイネイ (テイネイともテーネーとも)
かなしい【悲】 **発音**カナシイ (カナシイともカナシーとも)
くう【食】 **発音**クウ (クウともクーとも)

- 3 ウは、ウとも「u」とも発音されることを表わす。

うめ【梅】 **発音**ウメ (ウメとも「ume」とも)

- 4 ガギグゲゴはガ行鼻音「g」を表わす。

とげ【刺】 **発音**トゲ

ガ行「g」・ガ行「g」両様に発音されるものは両形を示す。

がが【俄俄】 **発音**ガガ(ガ)
あまごせ【尼御前】 **発音**アマゴ(ゴ)セ

- 5 ギ、ヅはそれぞれジ、ズにあらためる。ただし、見出しとヂヅだけが異なるものについては、いちいち注記しない。

ちぢみあがる【縮上】 **発音**チジミアガル
つづみ【鼓】 **発音**ツヅミ

- 6 動詞終止形の文語の発音は次のように示す。

おもう【思】 **発音**オモーとも
はらう【払】 **発音**ハラーとも

- 7 外来語でガ行鼻音になるものでも、見出しとそれだけが異なるものについ

ては、いちいち注記しない。

イギリス **発音**注記なし
イギリスこ【一語】 **発音**イギリスコ

二 語音史

- 1 発音の変遷を、個別的な変化をとげた語について解説する。原則として、規則的な変化をとげた語は除く。たとえば、語中語尾のハ行の音節は、同じ時期に一斉に変化したと考えられるので、いちいち発音の変遷についてはふれない。

- 2 現代語を除いては文献に記載された資料をもとに解説するが、文献の名をいちいち記さず、それらの推定される時代を左のように表記する。

上代 平安 中世(あるいは、鎌倉、室町のようにも) 近世 現代
資料からはっきり時代を推定できないものについては、「古くは」「後世」という表現を使うこともある。

いちじるし【著】
倉史平安頃まで「いちじるし」と清音らしい。中世は「いちじるし」の両様か。

- 3 現代語については、主として東京を中心とする標準的発音について述べる。

三 なまり

- 1 近代諸方言において、いわゆる標準語と発音の形は違っていても、もとは同じものから出たと見られる語をなまりとしてとりあげ、そのなまりと地域を示す出典とを、その標準語のなまりの欄に記す。

かしこい【賢】 **発音**カシカイ(南伊勢・紀州・和歌山県)カシクイ(NHK(宮崎)カシケ(千葉・鳥取)カシケ(岩手・福島・鳥取)カスケ(岩手・秋田・鳥取)カスケエ・カッケ(岩手)カコイ(大阪・伊予)

なお、標準語は現代標準語の場合だけでなく、過去の標準語の場合もある。また、諸方言の中に琉球諸方言までは含めない。

- 2 なまりは原則として個別的な変化語形を中心にして、東京方言におけるヒ↓シのような音韻法則的なものは除く。ただし、音韻法則的なものでも、一般にあまり知られていないものや、行なわれている地域が狭いものは、便宜上とりあげられる場合がある。

- 3 とりあげるなまりは、すべて、別冊にかかがる方言資料に記載されているものに限る。その資料と略号については、別冊の『なまりの注記に用いる資料および略号一覧』を参照されたい。

アクセントについて
四 標準アクセント

1 現代使われる語を中心として、□の中に現代の標準的なアクセントを注記する。付属語、東京以外の方言、特殊な古語などのように一定したアクセントを考えがたいものには注記をしない。また、見出しが二つ以上の構成要素から成りたつていて、それぞれの要素のアクセントから全体が類推できるものも原則として注記をひかえる。

2 注記のしかた

(イ) 下の「」内に示すように、□の中のかたかなは高いことを表わす。
この場合、名詞については、助詞の部分まで含めて示す。

そのら【空】 〔ソラガ〕
高低低
のほら【野原】 〔ノハラガ〕
高低低
やま【山】 〔ヤマガ〕
低高
かきね【垣根】 〔カキネガ〕
低高

(ロ) □内のかたかなが第三拍以後にあるものは、第一拍が低く、第二拍からそのかたかなまで高いことを表わす。

おもて【表】 〔オモテガ〕
低高
みずうみ【湖】 〔ミズウミガ〕
低高
わたしぶね【渡船】 〔ワタシブネガ〕
低高

(ハ) □は、第一拍が低く、第二拍から高いことを表わす。

かせ【風】 〔カセガ〕
低高
やなぎ【柳】 〔ヤナギガ〕
低高

3 アクセントを注記する拍と同音の拍が別にある場合は、番号をつけて示す。
こころ【心】 〔ココロ〕
低高

4 □内のかたかなは標準語音で示す。ただし、見出しと異なる形を□内に示す場合でも標準語音を注記しないこともある。

かげえ【影絵】 〔カゲエ〕
低高
うまうま【甘甘】 〔ウマウマ〕
低高
ゆのみちやわん【湯呑茶碗】 〔ユノミチヤワン〕
低高
オルゴール 〔オルゴール〕
低高

5 一語について、二種以上のアクセントがある場合は、標準的アクセントと
思われる型を先に示す。

あかとんぼ【赤蜻蛉】 〔アカトンボ〕
低高

6 一語について、二種以上のアクセントがあり、それぞれの標準語音が異なる場合は左のように示す。

おおい【多】 〔オオイ〕
低高

7 アクセントによる切れ目のあるものは、前後をつなぐ。この場合、アクセントは「」で切ったそれぞれのアクセント単位内で数える。なお、標準語音のある場合は、その場所に「」を入れて示す。また見出しの語構成ハイフンと一致しない場合、または見出しにハイフンの注記がないなど、切れ目が分りにくい場合に限り、あらためて標準語音に「」を入れて示す。

ななころびやおき【七転八起】 〔ナナコロビヤオキ〕
低高
いろはしじゅうはちもじ【以呂波四十八文字】 〔イロハシジュウハチモジ〕
低高
さんじゅうさんかいき【三十三回忌】 〔サンジュウサンカイキ〕
低高
あまのはしたてまつり【天橋立祭】 〔アマノハシダテマツリ〕
低高
いちのたにふたばぐんき【二谷嫩軍記】 〔イチノタニフタバグンキ〕
低高

8 動詞文語形の発音で見出しと異なる形が示してある場合、アクセントを左のように（ ）内に入れて示す。

はらう【私】 〔ハラウ〕
低高

9 外来語に限り、異形欄（ ）のアクセントも左のように（ ）内に入れて示す。

ウォーター【英 Water】（ウォーター） 〔ウォーター〕
低高

五 アクセント史

1 文献の記載をもとにして推定された京都アクセントを注記する。

2 過去の文献の名をいちいち記さず、それらのアクセントから推定される時代を左のように示す。

平安 鎌倉 室町 江戸

3 注記のしかた

(イ) アクセントは左のような記号を用いて示す。●○●○●○はそれぞれ一拍を表わす。

● 高く平らな拍

○ 低く平らな拍

●○ 高から低にくだる拍

○● 低から高にのぼる拍

かせ【風】 今史平安・鎌倉・江戸●●

こと【事】 今史平安・鎌倉○● 室町来●○

あめ【雨】 今史平安・鎌倉・江戸○●

いぬ【往】 今史平安●●

にじ【虹】 今史平安●○

はぎ【脛】 今史平安●○

(ロ) 一拍語はすべて二拍に発音されたと推定されるので、二個分の記号を用

いて示す。この場合、語音表記を今史の次に示す。

- こ【子】 今史コー 平安・鎌倉・江戸●●
- き【木】 今史キー 平安・鎌倉○○ 江戸○○●
- け【毛】 今史ケー 平安・鎌倉・江戸○○

4 活用形などを示す必要のある際は左のようにする。

- あかい【赤】 図「あかし」 今史平安●●● 江戸「あかし」●●●○
- あける【開】 図「あく」 今史平安●●○ 鎌倉来あく●●●●●

〈注意〉

いわゆる四段活用、上・下一段活用の動詞にあつては、語音の上に終止形と連体形の区別がないが、平安時代は終止形のアクセントを、鎌倉時代以後は連体形のアクセントを示す。

5 アクセント史の記述のために用いた資料の主なものは別冊に掲げる。

六 現代京都アクセント

1 現在、日常生活でふつうに使われる語について、現代京都におけるアクセントを○□の中に入れた形で注記する。現代京都アクセントはアクセント史を考える上に重要な意味をもつばかりでなく、標準語と対照的な性格をもち、かつ、西日本の方言では今なお大きな勢力があると考へて注記するものである。

2 注記のしかた

(イ) ○の中のカタカナは、その拍だけが低いことを表わす。

- たまご【卵】 余之○ [タマゴガ] [低高高低]
- ふぞく【付属語】 余之○ [フソクゴガ] [低高高低]

○の中のカタカナがその語の最後の拍であるものは、例外として、その拍が高から低にくだることを表わす。

- あめ【雨】 余之○ [アメメガ] [低高高低]
- マッチ 余之○ [マツチイガ] [低高高低]

◎は最後の拍だけ高く、それ以外は低いことを表わす。なお、一般の助詞がついた場合は、高い部分が助詞に移る。

- そら【空】 余之◎ [ソラソラガ] [低高高低]
- すずめ【雀】 余之◎ [スズメスズメガ] [低高高低]

(ロ) □の中のカタカナは、第一拍からその拍まで高いことを表わす。

- はな【花】 余之□ [ハナガ] [高高低低]
- ひとり【一人】 余之□ [ヒトリガ] [高高低低]
- かいたくしゃ【開拓者】 余之□ [カイタクシヤガ] [高高低低]

◎は、すべての拍が高いことを表わす。

- はな【鼻】 余之◎ [ハナガ] [高高低高]
- さくら【桜】 余之◎ [サクラガ] [高高低高]

3 京都語音が見出しの語形と異なる場合には、必要に応じて余之の下に京音を示す。

- とい【種】 余之トユ◎ [トユガ] [低高高低]
- あゆ【鮎】 余之アイ◎ [アイガ] [低高高低]
- しち【質】 余之ヒチ◎ [ヒチガ] [低高高低]
- るじ【露地】 余之ロージ◎ [ロージガ] [低高高低]
- おんなじ【同】 余之オンナシ◎ [オンナシガ] [低高高低]

4 京都語音では、一拍語は原則として二拍に発音されるので、余之の下に京音を特に示す。

- ひ【碑】 余之ヒー◎ [ヒーガ] [高高低高]
- ひ【日】 余之ヒー◎ [ヒーガ] [高高低高]
- ひ【火】 余之ヒー◎ [ヒーガ] [低高低低]

5 ガ行音とガ行音とは音韻的に区別がなく、同じ条件の場合にも交替しうるから、アクセントは「ガギグゲゴ」で示す。

- かげ【陰】 余之め [カゲエガ] [低高高低]

6 アクセントを注記する拍と同音の拍が語中にある場合は、番号をつけて示す。

- いろいろ【色々】 余之① [イロイロガ] [低高高低]
- いよいよ【愈愈】 余之① [イヨイヨガ] [低高高低]
- ほお【頬】 余之ホホ② [ホホオガ] [低高高低]

古辞書欄について

1 代表的な古辞書を選んで、各見出しと対照し、古辞書に記載されている場合、古辞書の欄にそれぞれの略称を示す。

2 扱った古辞書およびその略称は次の通り。該当するものが二つ以上ある場合は、次にあげる順に従って示す。

- 新撰字鏡〔京都大学文学部国語学国文学研究室編「新撰字鏡国語索引」による〕……………字鏡
- 和名類聚抄〔京都大学文学部国語学国文学研究室編「諸本集成和名類聚抄索引篇」による〕……………和名
- 色葉字類抄〔中田祝夫・峯岸明編「色葉字類抄研究並びに索引―本文索引編」による〕……………色葉

- 類聚名義抄〔正宗敦夫編「類聚名義抄仮名索引」による〕……………名義
 下学集〔森田武編「元和本下学集索引」による〕……………下学
 和玉篇〔中田祝夫・北恭昭編「倭玉篇研究並びに索引」による〕……………和玉
 文明本節用集〔中田祝夫他編「文明本節用集研究並びに索引―索引篇による」……………文明
 伊京集〔中田祝夫他編「古本節用集六種研究並びに総合索引」による〕……………伊京
 明応五年本節用集〔伊京集に同じ〕……………明応
 天正十八年本節用集〔伊京集に同じ〕……………天正
 饅頭屋本節用集〔伊京集に同じ〕……………饅頭
 黒本本節用集〔伊京集に同じ〕……………黒本
 易林本節用集〔伊京集に同じ〕……………易林
 和漢音釈書言字考合類大節用集〔明和三年再版本をカード化して索引にしたものによる〕……………書言
- 3 対象とした語は、それぞれの古辞書に訓みが付されているものに限る。ただし、訓みが不完全でもはっきり推定できるものは対象として扱う。
 - 4 古辞書に連語の形で記載されているものは、適宜分析してそれぞれの単語の項に収めるが、この辞典が見出しとして立てている複合語・派生語についてはその扱いをしない。
 - 5 活用語の場合、連用形転成名詞と考えられるものは名詞の見出しに、それ以外はその終止形を推定して、それぞれの見出しに収める。
 - 6 先に掲げた索引類の性格をそのまま踏襲する部分と、適宜勘案する部分とがある。その主な点は次の通り。
 - (イ) 新撰字鏡は天治本と享和本とを一括して扱う。ただし、万葉がなで記されたもの、ないしそれに準ずるものを採る。
 - (ロ) 和名類聚抄は、箋注本（十巻本）と元和本（二十巻本）とを一括して扱う。ただし、採否については、新撰字鏡の場合に同じ。
 - (ハ) 色葉字類抄は、前田本と黒川本とを一括して扱う。ただし、上巻・下巻において、前田本と黒川本とが、その掲げる語形に違いがある場合は、前田本のみを対象とする。一字漢字については単語と確定できるものは採るが、字音語素と考えられるものは採らない。
 - (ニ) 類聚名義抄は観智院本名義抄によるが、高山寺本・蓮成院本等によって誤字が訂正される語については採らないものもある。
 - (ホ) 下学集は、元和三年版により、本文左右の訓をはじめ、注の部分にある

語も訓のある限り対象とする。

- (ハ) 和玉篇は、慶長十五年版和玉篇による。一字漢字についての扱いは、色葉字類抄における扱いに準ずる。
- (ロ) 文明本節用集は、下学集の扱いに準ずる。
- (ハ) 伊京集はじめ六種の節用集は、ほぼ前掲の索引の扱いにならうが、天正十八年本節用集にみられる後筆による書き込みは一切対象としない。
- (ウ) 書言字考節用集は、明和三年再版本の見出し語について、左右の付訓すべてを対象とする。

その他

見出し相互の関連について

見出しを立てても、その解説をそれぞれ別の見出しにゆだねる場合、次のようなかたちで示す。

- 1 解説をゆだねる項目が親見出しの場合
 あずまおり【東折】「あずまからげ（東紫）」に同じ。
 あいづ【会津】↪あいず（会津）
 い（好）事（こと）↪親見出し
- 2 解説をゆだねる項目が子見出しの場合
 いいこうい【夷攻夷】「い（夷を以って夷を制す）」に同じ。
 あか（赤）き心（こころ）↪「あかい（明）」の子見出し

字音語素について

- 1 漢語を構成する字音の要素について、漢字ごとにその意味を示し、その漢字で構成される熟語を掲げる。
- 2 とりあげる漢字は、日本において使われるものを中心にするが、熟語の例は、漢籍に用いられるものにも及ぶ。
- 3 同じ字音の漢字を一つの見出しのもとに集め、それぞれの漢字について、【】で包んで漢字欄を子見出しとする。
- 4 『字音語素』の表示の下に、収載するすべての漢字の一覧を掲げる。
- 5 漢字は、主として、字形構成上の表音部分によって分類し、表音部分を共通にするものを類として、表音部分の画数によって配列する。共通の表音部

分をもたない漢字は、最後に一括して一類とする。

6 表音部分を共通にする漢字の類の中では、画数順に配列する。

7 共通表音部分をもたない漢字の類の中では、総画数によって配列する。

8 熟語は、漢字の意味の区分けごとに、その漢字の熟語構成上の役割から、重畳・対義・類義結合、後部結合、前部結合等を／で区分けして列記する。

9 漢字欄には、当用漢字については、新字体を示し、その下に旧字体を付して旧字体をも示す。

10 漢字欄の下に、その見出しとした音の呉音・漢音・唐音・慣用音の別をそれぞれ略号で示す。ただし、呉音・漢音が同音のものについては省略する。

11 漢字欄の下に、歴史的かなづかいを示す。

12 その漢字の別音を別の字音語素として掲げるときは「↓…：…」のように、また、一般語に、その字音が独立して語をなすものを名詞等として掲げるものがあるときは、それぞれ、▽を用いて参照すべきことを示す。

五十音の仮名字体表について

1 五十音のひらがな、かたかなの字体表を各音の冒頭に掲げる。

2 字源となるものの楷書を標示し、以下省略の順序をあげて、現在の字形の起源が理解できるように示す。

3 異体がな、変体がなを、主要な写本から選んで、その出典とともに掲げる。

4 古事記・日本書紀・万葉集に見られる主要な万葉がなを付記する。

(中田祝夫博士の指導によるものである)

図版について

1 風俗・服飾・有職・調度・図像・仏具などについて、絵巻物・図誌あるいは作品のさしえなどから模写し、その出典を明記して掲げる。

2 文様・紋所・構造等、語釈のみではその意を尽しがたいものについて、それを図示する。

